

立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花

64回（昭和32卒） 渡部 功

今年も我が家の庭の白花と黄色花の牡丹が盛りです。花王と呼ばれるだけあって風格のある花を咲かせています。

ところで、「立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花」という諺があります。女性の美しい立ち振る舞いや容姿を、花にたとえて表現する言葉です。主に美しい女性を形容する言葉として使われていますが、広い意味では女性の美しい仕草や話し方など、女性の魅力が輝く所作において「美しさ」を感じた時に使われているように思います。これの由来を調べてみると、言葉に登場する三つの花の魅力からきていると言われてはいますが、それぞれの花の特徴を簡単に見てみましょう。



芍薬の花

- 「芍薬」 ボタン科の多年草で、細くすらりと伸びる茎が特徴です。花は牡丹によく似ています。
「牡丹」 ボタン科の落葉小低木で、枝分かれした先に豪華な花をつけます。
「百合」 ユリ科の多年草で、茎を高く伸ばしそよ風に揺れる筒状の花の姿が美しい。



牡丹の花

これらの花の特徴から「まるで、女性の美しい立ち振る舞いは芍薬のよう、女性が優雅に座っている姿は牡丹のよう、女性が軽やかに歩く姿は風に揺れる百合のよう」というたとえに繋がり、この諺が誕生したと考えられているようです。

もう一つの由来としては、花の咲いている状態をそれぞれの姿勢にたとえたというものです。つまり、芍薬の花は、まっすぐに伸びた茎の上に咲き、牡丹は、横向きに伸びた枝の先に花を咲かせ、百合は、茎を高く伸ばし、筒状の花をそよ風に揺らして咲くところから、「立つ」、「座る」、「歩く」、それぞれの姿勢に当てはめたというものです。

更に、花を鑑賞する姿勢に適した姿勢の違いによる説があるようです。芍薬は立って上から見ると見やすい、牡丹は横から見るのがよく、百合は歩きながら見るのが美しいというものです。いずれも一理あるようです。

なお、芍薬、牡丹、百合は、花を觀賞するばかりではなく、薬としても活用されており、牡丹のすべてが生薬にはならないそうですが、一重の花びらを持つ牡丹の根の皮は、乾燥させた物を「牡丹皮」（ぼたんひ）といい、血の流れが障害された「瘀血」（おけつ）に効果があるそうです。



百合（永良部ユリ）の花

芍薬は風邪の薬で有名な「葛根湯」（かっこんとう）や「こむらかえり」や「足のつり」に効く「芍薬甘草湯」（しゃくやくかんぞうとう）などに配合されています。

鬼百合、博多百合（鉄砲百合）やユリ属の球根は百合（びやくごう）という生薬で、滋養強壮、利尿、鎮咳などの効果があつて「夷清肺湯」（しんいせいはいとう）などに使用されています。

芍薬と牡丹は、ともにボタン科の植物であり、写真で見ると非常に似ていますが、両者の相違点を次表のとおりまとめておきます。

相違点	牡丹	芍薬
相違点1	樹木であり、落葉して越冬する。翌春茎から芽を出す。花王とよばれる。	多年生草本であり、根を残して枯れて越冬し、翌春に新芽を出す。花の宰相、花相と呼ばれる。
相違点2	幹があつて枝分かれして花を咲かせる。	真っ直ぐに茎をのびし、伸びた茎の先に花を咲かせる。
相違点3	花のつぼみは先が少しとんがっている。	花のつぼみは真ん丸である。
相違点4	花は一気に豪快に散って行く。	花は最後までしがみつinaながら散って行く。
相違点5	開花時期が4月下旬から5月初旬（晩春）である。	開花時期が5月初旬から5月下旬（初夏）である。
相違点6	基本的に香りはない。	バラに似た爽やかな香りがある。

本県遊佐町出身の鳥海昭子（注）さんは、『ラジオ深夜便誕生日の花と短歌 365 日』で、芍薬、牡丹、百合（山百合）について、それぞれ次のように詠まれています。

・芍薬（5月24日）

シャクヤクの赤く角（つの）ぐむ彼（か）の日あり はじらうほどの花の膨らむ

「角ぐむ」は角のように目を出すこと。シャクヤクの目がえんじ色に出そうと、雪国の春も確実なものでした。花を待つといううれしさがあります。

・牡丹（4月30日）

あるなしの風にゆれつつ白牡丹 神々しくて清々しくて

かすかな風に揺れている白いボタンは、神々しくまた清々し。その姿に息をのみ、祈る気持ちになってしまいました。花ことばの「風格」を感じさせます。

・山百合（7月21日）

築山（つきやま）を埋めるヤマユリ 大祖（おおおや）の魂（たま）集うごと荘厳（しょうごん）に咲く

築山は、庭園などに造った人工の山。その山を埋め尽くすように五百本近いヤマユリが咲きました。まるでこの築山を造った遠い先祖たちの魂が集まっているかのようです。

（注） 本名を中込昭子といい、昭和4年（1929）年、遊佐町上蕨岡の宿坊「山本坊」に生まれ、19歳で東京、苦学して大学を卒業し、児童養護施設、東京家庭学校の先生としての仕事に就いた。仕事に関わりながら短歌の秀作を次々に発表し、昭和60（1985）年、歌集『花いちもんめ』で現代歌人協会賞を受賞した。口語的な表現と自由旋律で、人間への深い愛情を詩情豊かに詠い注目された。『どっぴん語り』、『逆立舞』などの歌集のほか、『種をにぎる子供たち』、『語り部歌人鳥海昭子のほんのり入院記』などのエッセイ集も多数ある。

平成17（2005）年からNHKのラジオ番組「ラジオ深夜便」の中で「誕生日の花と短歌365日」を発表していたが、放送中の平成17（2005）年10月に亡くなった。逝去後の平成26（2014）年5月8日に生家の庭園に「季とき」外（そ）れて咲くタンポポの 小かさよ それでいいのよ それでいいのよ」という2月7日の花を詠んだ短歌を刻んだ歌碑が建立された。